

# 飢饉の歴史地理学的研究

——インドを中心に [1] ——

二 木 敏 篤 ・ 井 手 口 敬

(1996年1月24日受理)

## 1 はじめに

“飽食の時代”と言われる日本人の食生活からは、“飢饉”と言う用語が既に死語化しており、近年ではアフリカを始めとする発展途上国だけに見られる現象と思われていた。しかし、1993年の我が国の農業生産は戦後最悪の大凶作となり、飢饉が再び現実のものとして人々の心に不安の気持ち呼び覚ますことになった。

農林水産省が、1993年12月24日に発表した米の最終的な作況指数は、平年作を100として74と「著しい不良」であった。水稻の収穫量は781万1,000トン、陸稲は2万2,700トンで、合計783万3,700トンとなり、前年生産と比べ273万9,000トン(対前年比-26%)と大幅な減少となった。冷害と長雨が原因であったが、米の被害総額は、9,300億円と報告された<sup>(1)</sup>。年間の米需要は約1,000万トンであるため、前年の在庫をはきだしても大幅な米不足となり、260万トンが緊急輸入された。近年、我が国は世界最大の食料輸入国であり、穀物自給率は主要先進国のなかでも最低で30%にすぎない。我が国の全輸入農産物総額は2,367億7百万ドルで、輸入総額に占める割合は11.6%(1991)と極めて大きくなっている。世界人口の急増が今後も続くと思われるだけに、世界の食料需給の見通しには不安要因が大きい。そのなかで、我が国の海外経済協力基金と中国農業省の農村経済研究センターは、中国の穀物需要が2010年には1億3,531万トン不足する可能性があるとの試算結果をまとめた<sup>(2)</sup>が、この事実からみても我が国の食料の安定輸入がいつまでも続くことは期待できない。飢饉は、将来の我が国にとって他人事ではすまされない問題なのである。

『飢えの地理学』で知られるカストロは、飢餓問題を取り扱うのは微妙で危険であるとし、この研究がタブーの一つとなっており、飢餓現象とその発現の様相についての書物が殆どないことは実に奇妙であると述べている<sup>(3)</sup>。飢餓の与える損害は、戦争と流行病による損害をあわせたものより大きく「飢餓は不断かつ実際的な戦争原因の最たるものであり、また大規模な流行病発生の際の、ほとんど必然的な準備段階をなす<sup>(4)</sup>」だけに、飢餓をめぐるこの沈黙は「現代文明」の道徳的偏見であり、政治的・経済的な立場から飢餓を隠さんとする力が働いたことが原因であると言えよう。

## 2 飢饉の定義とその諸問題

古代から現代に至る残された記録によれば、いつの時代、いかなる社会においても飢饉を避けることは出来なかったことが解る。FAOは1人当たり1日2,350Calを標準栄養

単位と定めたが、これは基礎新陳代謝量が1人1日1,600~1,700Calに基づき算定されている。この必要カロリー量は、性、年齢、職業とその労働の内容、身長や体重、環境（とくに気候）によって当然大きな差があるが、もしこの基準最低量を3か月続けると死亡する<sup>(5)</sup>とされている。

イギリスの経済学者マルサスは『人口の原理』において飢饉の生じる原因として「私は二個の公準 (postulata) を置くことは正当に許されると考える。第一、食物は人類の生存に必要であると言うこと。第二、両性間の情慾は必要であって、大体いまのまま変りがあるまいと云うこと。……(上記の) 私の公準は承認を得たものとして置いて、茲まで来て、私は、人口の増加力は、人類の生活資料 (subsistence) を生産すべき土地に於ける力よりも不定に大きいと主張する。人口は制限せられなければ、幾何 (等比) 級数的に増加する。生活資料は算術 (等差) 級数的にしか増加しない。数字のことを少しく知れる者には、前者の力が後者のそれに比してどれ程大きいかがすぐにわかるであろう。而して人類の生活には食物が必要であると云う吾人の性質に関する法則は、この二つの不對等力の結果を対等のものとしなければやまない。乃ち生活資料を得ることが困難となるために人口の制限が強く且つ絶えず行われるのである。……而してどの種の植物も、どの種の動物も、この一大制限的法則の下に屈しなければならぬ。而して人類も亦、如何に理性の力によるも、この法則から免れると云う訳には行かない。植物と動物とは、この結果として、種子の浪費と疾病と早死にとがある。人類には窮乏と悪徳とがある。前者、即ち窮乏は絶体的にこの法則の必然の結果である。悪徳もかなり大きい程度に於いてこの結果であって、……あらゆる生物を支配しているこの法則の重荷を、人類のみが逃れ得る方法があるであろうか<sup>(6)</sup>」と述べている。つまり、飢饉と言うものを人口が食糧供給との均衡を保つための自然の調節作用と考えたのである。この意味では、飢饉と人口過剰とはきわめて同義語に近い。

頻発する飢饉は人口バランスを決定する重要な部分を占めるとし、現代の開発途上地域でこの人口過剰が飢饉発生の原因となっていると述べるのが Brown<sup>(7)</sup> である。

飢饉とは「農作物がみのらず、食物が欠乏して、飢え苦しむこと。食物以外でも必要な物質がいちじるしく不足する場合にいう (広辞苑)」とか「農作物のできが非常に悪く、食糧が欠乏すること。また、比喩的に、特定の必要な物資が非常に不足することにも言う (日本語大辞典)」、「穀物や蔬菜がとれないこと、またそのために食物が欠乏すること (大漢和辞典)」などを指すが、古語大辞典では「ケカツ (飢渴) ……腹が減り、のどが渴くこと、食物や水が欠乏すること」とある。近世では、「ケカツは、地方によってケカチ (ケガジ) とかがシ (ガシン) とか言われていた。漢字を当てれば、飢渴・餓死となるように、食糧が極端に欠乏して、飢餓状態に陥り、やがては餓死あるいは疫病死するに至る。これが飢饉であった。民族学者の語義的解釈によれば、ケは日常の生命を維持・増進させるエネルギーのようなもので、これが不足して欠けた状態がケカチだと説明されている。人間にとって日々の食べ物こそ生命を支える根源であるから、その欠乏はまさにケカチである<sup>(8)</sup>」。しかし、これらの説明は飢饉と飢餓・飢えなどの差異を明白にするものではない。この点、飢餓の意味について広辞苑は「一時的、地域的現象である飢饉と対比して、永続的、慢性的な食糧不足や低栄養状態をいう場合あり」として飢饉と飢餓を明確に区別している。また「広範な飢えを起こすような厳しく、長期間にわたる食糧不足であって、飢饉あるいは被害者の弱った状態から生じる伝染病などによって、ものすごい数の死に普通つながる<sup>(9)</sup>」こ

とは飢饉をより具体的に明らかにしたものと言えるが、まだ問題は残されている。この用語の混乱は英語にも共通する。

英語では飢饉を意味する語として *famine* があるが、他に *hunger* (飢え, 飢餓, 空腹, ひもじさ, 飢饉), *starvation* (餓死, 飢餓, 窮乏), *malnutrition* (栄養不良) なども用いられその差異は不明確である。そこで若干の所説を取りあげ検討したい。

まず, *malnutrition* についてみると, *mal* という接頭語は, 悪いとか悪くいうという意味で, *mal-nutrition* という言葉が人間に対して使われた場合には, 食事が悪いとか適当でないということを意味する。しかし, それは栄養失調をおこす食物の摂取量の不足と同じ意味で使われることが多い。栄養不良はそれがただちに死を意味するものではないにしても, それが持続すれば死につながるものであると, イギリスの著名な地理学者スタンプは『生と死の地理学』<sup>(10)</sup> で述べている。

*hunger* の概念は広範であるが, 個人的 *hunger* と集団的 *hunger* を区別する必要がある。スタインベックは『怒りの葡萄』で, 世界一豊かなアメリカの最も豊かな地方での「ジョード家」の飢餓を描いたが, これは *hunger* が, 個人的な諸事情で被害を蒙ることであり, この意味での *hunger* は本研究の対象からは除外する。集団的 *hunger* とは人間の大集団を地方病または流行病のように襲う飢餓の現象で, この集団的飢餓は, 全面的飢餓, (英語国民がスターベーションとよぶ本当の栄養失調で, 極度の窮乏地域と例外的事態に局限せられる現象) だけではなく, 部分的飢餓, 「隠れた飢餓」のような, もっと起りやすく数字的にさらに重要な現象も含むもの<sup>(11)</sup> であり個別的 *hunger* と区別されている。イギリスの作家 Bernard Shaw は『人と超人』のなかでアイルランドに起こった1846～51年の大飢饉のためアメリカに移住したマローン (M) とバイオレット (V) の会話の中で「(M) 私の父は暗黒の47年にスターベーションでなくなりました。すでにお聞きのことでしょう。(V) 飢饉で? (M) いいえ, 飢饉ではなくスターベーションによってです。国内に食物が一杯あり, しかも輸出をもしている。それは決して飢饉ではありません。私の父はスターベーションで死んだのです。そして, 私もスターベーションのため, 母に連れられてアメリカに渡ってきたのです<sup>(12)</sup>」と語っている。ここでは飢饉を食糧の絶対的不足とし, スターベーションを個人的食糧不足と考えているようである。しかし, この見解には疑問が残る。問題は *hunger* と *starvation* をどう区別するかで, 前者がより広範な意味を含むと考える説があるが, ほぼ同義とみることが多いようである。

*famine* については, ブリタニカ百科事典では「食糧の極度でかつ長引く不足が広範囲に酷い *hunger* をおこし, そのために衰弱して死亡率が急上昇するのが飢饉で, それは, 一般的飢饉と階級的飢饉とに分けられる。前者は人類のすべての階級が影響をうけるが, 後者はある特定の階級, グループ, 一般には貧民が被害をうけるものをさす」と記述されている。Nicol は *famine* と *starvation* は同義語と考えているが, 食物入手の不公平の結果として *famine* が起こると考えている<sup>(13)</sup> ようである。Post は, 飢饉は *starvation* によって死に至ること<sup>(14)</sup> とし, Lowenberg も「飢饉は, 通常, ある地域内で食糧に深刻な不足が生じ, 食糧の不均等な分布がおこる。そこに適切な食糧援助がなされない時に発生する。飢饉は, *starvation* と疫病による死の原因となる<sup>(15)</sup>」と述べている。また, *famine* は *starvation* を含むが, *starvation* は *famine* を含まないとの説もある。カストロは飢饉を非常に多数の人々に影響を与える流行性の飢餓としている<sup>(16)</sup>。なお, 飢饉に

については「大衆の飢餓と貧困状態と理解し、貧困が生み出す“飢餓と病気の悪循環”あるいは「慢性的食糧不足と同じ」との説もある。

Paddock は「恐らく、人間は食糧不足により身体が衰弱し、倒れたとき、malnutrition と starvation との間に一線を画するものとなる。そして、すべての家族、すべての地域社会が衰弱する時、それを飢饉と呼ぶのである<sup>(17)</sup>」。また、慢性的 malnutrition は famine と同じあるいは、更に単純に famine 即ち malnutrition だとの説もある。

Rechcigl は英国の500～1500年の記録から124の飢饉を採り上げ、その原因が気候の悪条件による穀物不作から起こったことを明らかにした<sup>(18)</sup>。また、多くの研究者は飢饉が異常な気候により起こる穀物の不作と同義語であると考えている。その気象学的原因としての長雨、降霜、旱魃などは社会的理由より理解しやすいとしている。

Brothwell は「飢饉は厳しい malnutrition から起こるもので、記録によればこれは気候条件の悪さ、疾病の流行や、政治的抗争により適切な農業対策が取られなかったことと食糧分配上の破綻などによって起こる<sup>(19)</sup>」としている。一方、社会的条件を重視する説として、Farmer は19世紀の飢饉は食糧の絶対的な不足から起こったが、現代の飢饉は十分な食物が摂取できない状況に貧民を追い込む政治に原因がある<sup>(20)</sup> としている。そして、Mayer は一定期間、いずれかの地域で食糧が得られても、援助機関が危機的状況に対処できなければ、飢饉は限られた地域に発生する<sup>(21)</sup> とし、Malin は「飢饉は資本主義体制のなかで必然的に起こるもので、その生産様式が人々の需要を充足させるものでなく企業が最大利潤を追求することが目的であるために起こる。つまり飢饉は資本主義制度に固有の副産物なのである<sup>(22)</sup>」と述べている。しかしこのマルキストの説は、1921～1922年と1932～1934年の旧ソ連で起こった大飢饉の発生をいかに解釈すべきかに問題を残す。本研究では、飢饉を Southard<sup>(23)</sup> と Dando<sup>(24)</sup> の定義から「食糧需給の失敗の結果、限られた地域の人口が長期間の極端な食糧不足で生じた飢餓により、病となり、死に至る状況」と一応定義しておく。以上概観してきたように、飢饉の定義の混乱は飢饉の科学的研究の少ないことに原因があると考えられる。

### 3 飢饉の歴史(1)

Dando は世界の飢饉を過去6000年にわたって調べ、その間に起こった主要な800の飢饉の分析から飢饉を5類型に分類している<sup>(25)</sup>。

#### 類型Ⅰ 自然災害型（エジプト型）BC5000～BC500年

自然災害を主原因として起きる飢饉の型である。人類が定住生活を始め、集約的栽培による農業生産が展開されるが、エジプトではナイル河の定期的氾濫を利用した灌漑により高い生産力がもたらされた。一般的に、自然災害が起こると農業生産に大きな障害が生じることになる。エジプトでは、ナイルの水位変動が原因で旱魃や洪水が起こったが、ある程度の水位変動に対してはこれに対処できる技術を持っており、災害の影響を小さく抑えることができた。しかし、技術水準を超える暴威により自然災害が避けられなくなると飢饉が発生した。つまり人為を超えた自然災害により飢饉が生じる型である。

#### 類型Ⅱ 輸送欠陥型（ローマ型）BC501～AD500年

ローマ帝国は全ヨーロッパにその領域を拡大した。この時代、ローマを中心として都市

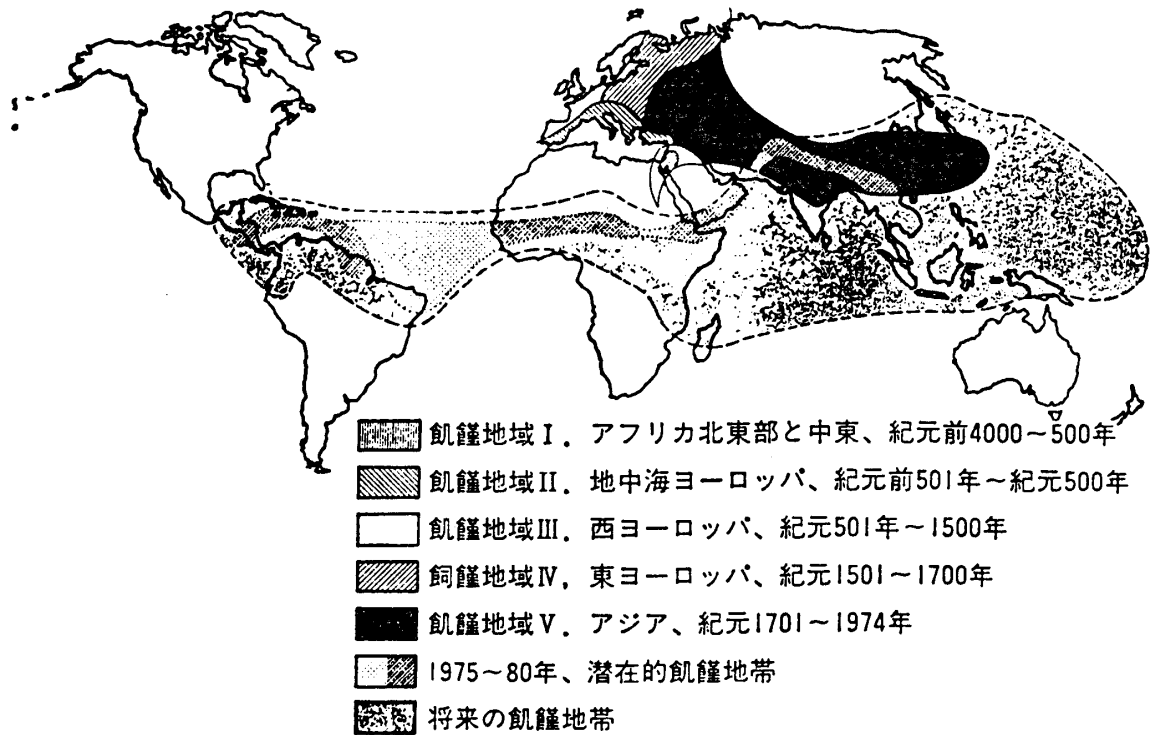


図1 世界の飢饉地域，紀元前4000年～西暦1980年 (Dando, p. 71)

化が進展し，商業や工業も発達したが，都市はまた食糧の大消費地でもあり，そこに農業地域から食糧が安定供給されてはじめて都市は存続することができる。しかし，帝国の領域拡大によって，その食糧供給が遠隔地からの輸送に大きく依存することになったため，輸送が順調に行われている時はよいが，輸送上に問題が生じることが飢饉を発生させることになった。

### 類型Ⅲ 文化停滞型（西欧型）AD501～1500年

旧弊な社会組織や農作物栽培上の古い慣習による低い生産性，極端な土地や財産所有の不平等が主な原因となり，増加する人口との間にアンバランスが生じることによって食糧需給に問題が生じ，それによって飢饉が起こるとされる型である。

### 類型Ⅳ 政治欠陥型（東欧型）AD1501～1700年

基本的には，食糧自給地域にみられる型である。封建的土地所有，殊に王侯貴族による大土地所有と農奴との関係を基軸として農業生産が展開され，食糧の生産，分配とその利用は両者の関係により決定されるが，この関係が農業政策に反映され，この農業政策上の問題が飢饉の発生に直結したとされる型である。

### 類型Ⅴ 過剰人口型（アジア型）AD1701～第二次大戦後

産業革命以降，世界の中心となった西ヨーロッパからみて，ロシアからアジアにかけての地域は世界の縁辺地域であった。この地域は広大な国土をもつが，過剰人口を抱え食糧不足に悩んできた。古い農業制度が残存する農業地域のため生産性は低く，その住民の生活水準も低かった。食糧生産は多年にわたって飢餓ラインを僅かに上回るに過ぎなかったため，僅かな気候変動でもたらされる早魃や洪水などの自然災害が繰り返されることで飢饉が発生してきた型である。

飢饉の歴史は人類の歴史と共に始まった。そして，飢饉はいつの時代，いずれの地域に

も起こった。ただ、飢饉の記録の初見は古代文明が始まって以来のことであり、文字の発明以来のことであった。その事例がエジプト文明の起こったナイル川流域やメソポタミア文明の起こったチグリス・ユーフラテス川流域に見られる。以下、Dando の論説を基軸とし<sup>(26)</sup>、そこに若干の修正と第二次世界後の知見を加えて世界の飢饉の歴史を概説する。

#### 西アジアと北アフリカ (BC4000～BC500年)

農業生産を基盤とする古代文明の中心として発展したのがナイル川、チグリス・ユーフラテス川流域であった。広大な氾濫平野とデルタ地域は周期的な河川の推積作用による肥沃な土地で、これが豊かな農業生産を支え、経済的発展を促してきた。

エジプトの気候は、ヒプンサーマルの高温期が終わる前3千年紀末から現代の気候に近づいた。BC2350～AD700 までは現在と比較して気温はやや高く、降雨量はいくらか少なかったようである。青ナイル・白ナイル・アトバラ川を合わせたナイル川は1年のうち7～8カ月は水も澄み、穏やかに流れるが、エジプトではナイル川の流量は5月から6月上旬が最も少なく、6月下旬頃から次第に水量が増し、7月になって本格的な氾濫が始まる<sup>(27)</sup>。そして1月までに水位は低下する。古代エジプトの農業は、この氾濫した水を利用して行われていたため、その農地は、ファイユームやデルタ地方と同様に、ナイル河谷の幅20kmほどの細長い沖積の氾濫原においても、氾濫期に溢流のとどく範囲に広がっていた。このようにナイルの氾濫と排水とが密接に関連して発展してきたエジプトの農業は、このナイルの氾濫水位の高い年は豊かな収穫に恵まれたが、水位の低い年は農産物の収量が減じ、ときには飢饉に至ったのである。

飢饉の世界最古の記録は、ナイルの第一滝にあるサハル (Sahal or Sihel) 島の花崗岩の墓石に刻まれたもの<sup>(28)</sup> で、エジプト学者によれば、およそ BC4247年の Tcheser (Djeser) 王の時代のもので推測されている。それは、この王の時代に7年も氾濫がなく食糧が不作で人々の道徳も乱れ、気力がまったく失せた様子を「穀粒は軽く、収穫は少なく、あらゆる種類の食糧は不足している。……食糧の箱を引き裂いても中にあるのは空気のみ<sup>(29)</sup>」と叙述している。

兄たちにより奴隷商人に売られてエジプトにわたったヨセフは30才のときエジプト王パロの前に出る。その後ヨセフはエジプト全国を巡回したが、この国は七年の豊作で食糧は満ち溢れていた。彼はこの食糧を集め貯えた。「エジプトの地に臨んだ豊作の七年は終わった。ヨセフの言ったように、飢饉の七年が始まった。飢饉は総ての国々に臨んだが、エジプトの国には食物があった。エジプト全国は飢え、民はパロに向かって食物を求めて叫んだ。

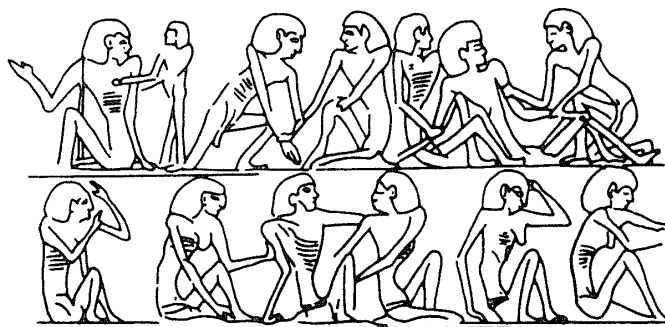


図2 エジプトの飢饉

(荏開津典生, p. 131)

パロがエジプト全国に向かって言うには『ヨセフの処へ行け。彼はお前達に為すべきことを告げるであろう』。飢饉はこの国の全土に臨んだ、ヨセフは総ての穀物倉を開かせエジプト人に穀物を売った。飢饉はエジプトの国にひどかった。又総ての国の人々が、穀物を買う為にエジプトのヨセフの所に来た。飢饉が全地にひどかったからである。(創世記第41章53～57)<sup>(30)</sup>」アブラムは放浪しネゲブ地方に移ったが「この地に飢饉があったのでアブラムはエジプトにしばらく留ろうとしてエジプトに下った、この地に飢饉がひどかったのである(同第12章10)<sup>(31)</sup>」。「最初アブラムの時にあった飢饉の他、もう一度その土地に飢饉があったので、イサクはペリシテ人の王アビメレクを頼ってゲラルに赴いた(同第26章1)<sup>(32)</sup>」などと旧約聖書には飢饉の記述が多い。

#### ローマ帝国 (BC501～AD1500年)

ローマ帝国の貴族の食生活は贅沢の限りをきわめたが、反面では、帝国内には飢饉が頻発した。この食糧危機は、輸送問題に大きな原因があった。例えば Samuel Dill はこれを「アフリカの穀物運搬船が定期的にオステイア港に到着することを中止した。そしてそのためにローマの大衆の間に飢饉の恐怖が広がった。人々は陰鬱となり不安となった。それは嵐の襲来のあらゆる兆候となった。上流階級の家族は安全をはかって田舎の地所に隠退するために飛散した。市民の困窮は元老院の手で20日間の救済の『oblatio (奉献)』によって一時的に救われた<sup>(33)</sup>」と記述している。

農民は自らが食糧の生産者の立場にありながら被抑圧階級であるため食糧不足の際には真っ先に被害を受けた。飢饉のときには彼等はパンを求めて町へと群がり集まった。ときには政府や地主によって貯蔵されていた食物が市民に与えられた。特にローマには外部からも飢饉の際には食物を求めて人々が群がった。こうして集ったローマ非居住者の追い出しのために法令が発せられた。このような事態について、ある貴族は「もし、そのように多くの耕作者が飢えに苦しみ、そんなに沢山の農夫が死ぬのならば我々への食糧供給は永久に破滅するであろう。我々は毎日のパンを正常に供給する者を排除している<sup>(34)</sup>」と食糧生産を担う農民の飢餓の実情を憂慮している。

これらの飢饉は、陸上の輸送手段の不備により食糧余剰地域から不足地域への食糧輸送がスムーズに行われぬために起こることが多かった。食料の不足地域ではその価格が急騰し、貧しい庶民は食料に手が届かず、そのために飢餓が生じたのである。ローマ帝国では大きな飢饉による災害が少なくとも25回は起こったと言われる。飢饉は BC450年に始めて記録されており、それは20年後の BC430年まで続いた。飢餓に苦しんだ何千人もの人々はその身をチベル河に投じることでその苦しみから逃れんとした。およそ、その50年後にゴール人がローマ市を包囲した際にも城壁内部には飢饉が発生し、AD 6年の飢饉でも何千人もの死者がでた。さらに、AD79年から88年までにイタリア半島全域で旱魃が続き、人命に大被害が起こっている。この飢饉では、ローマ市だけで1日1万人もの死者が出たと言われる。そしてその100年後、いなごの大発生があり、あらゆる農作物が喰いつくされ、困窮した農民は村を逃れて都市へ向かったもののその途中で力つきて、毎日、何千人もが道路脇で死亡したと言う。やがて、飢饉はローマ市内にも及び、短期間ではあったが、この飢饉でも1日5,000人もの住民が死亡している。この他にも多くの飢饉がローマの支配下にあったギリシア・イスタンブール・小アジアさらに西アジアのユダヤ地区などでも記録されている<sup>(35)</sup>。

384年にはローマ帝国の支配下にあったアンチオキア（現シリア）でも飢饉が発生した。この飢饉では国中に乞食が溢れ、食を求めて流浪し、町も乞食で溢れたと言う。彼等の多くは耕地を放棄した農夫であった。陸上輸送の不備のため、ある地域で飢饉が起こり食糧価格が上昇したものの、同じ時期に、他地域では食糧の価格も低く、飢饉は起こっていないことも多かった

#### 西ヨーロッパ（AD501～1500年）

3・4世紀にはローマ帝国は内部抗争と頽廢によって衰退する。そしてローマに代ってヨーロッパの中心となったのが西ヨーロッパ地域であった。しかし、この地域は小王国に分裂しており、その内部では野蛮と言われるゲルマン民族の文化・習慣がローマ文明を変容させていった。市民の安全を守る手段であった法（ローマ法）から野蛮で迷信にみちた法（ゲルマン裁判法）に基づく社会に変わっていったのである。一般的に住民の安全を保護する組織化された統一国家は存在せず、広域的な商品取り引きも行われず、交換の媒体としての貨幣も用いられることはなかった。しかも、広域的な交通網は寸断されていたため文化的・経済的停滞をもたらされた。また、ゲルマン的土地所有の浸透によって、農地は王侯・貴族を中心とする荘園と大所有地に分割され、そこで自給目的の農業が行われるようになると商業活動の中核となるべき都市の重要性は、次第に失われることになった。この時期、荘園領主による食糧不足や飢饉に対する備えはなく、飢饉の際にとるべき救助対策は全くなされないことが多かった。さらに飢饉を永続させる他の要因として、輸送手段の不備、人々の心に潜む恐怖心、偏見、嫉妬心、それに戦争の影響などが加えられた。西ヨーロッパの人口の80～90%を占める農奴の多くは、その生活に夢も希望ももてず、実質的には奴隸的存在であった。彼等は地主の道具として生きてゆくことしかできなかったし、暴力に対する防御策はなく、食糧不足の恐怖は避けえず、しばしば飢饉に見舞われた。

こうした状況の下で、イギリスでは501～1500年の間に少なくとも95回の飢饉が起こった。フランスでも同期間に75回以上の飢饉があったといわれる。しかし、これはかなり控え目の数字であるとみられる。フランスの年代記作者は農民の生活には全く関心を抱くことはなく、そのためその生活は詳しくはわからぬが、多くの農民の生活は、土地なく気力なく、ほとんどが貧しさをただじっと我慢するだけの単調なものであったと思われる。Davisはこの農民の生活について「貧民は草や根をかじり、白い粘土すら空腹のためむさぼり食った。彼等は顔色が蒼くその体は痩せこけ、その腹はむくんでふくれており、その声はかぼそく小鳥の鳴き声のようなキイキイ声であった。狼は森を出て農民の子供を襲って食べる。外国人や旅人は寂しい場所で待ち伏せた者たちに襲われ、食用にされるため殺害された。マコン（リヨン市北方）近くの隠者は彼の小屋へ親切なふりして旅人を誘惑して招き入れた。彼はやがて捕らえられたが、その部屋では48名分の頭蓋骨が発見された。……市場には時折人肉が販売されたし、……飢餓に苦しむ子供に食べ物をやろうと騙しておびきよせ、殺して食べた<sup>(36)</sup>」と記している。Bennettは、飢饉はフランスではイギリスより頻発したと述べたが、フランスについて Luchaire を引用して「飢餓による死者は平均すると4年に1度、48回の飢饉が11世紀のみで記録されている<sup>(37)</sup>」と述べている。この数字は上記のものに比してはるかに多く、これが実態に近いものであったと思われる。飢饉とそれに伴って流行する悪疫は、これまでも珍しいことでなく、それが死者の数が多くなる主因であった。酷い食糧不足の年には人肉食（cannibalism）さえあったことを採り上



げている。

さらに別の年代記作者によると、飢饉はイギリスとフランスだけでなくウェールズ、スコットランド、アイルランドにドイツ、デンマーク、スウェーデン、さらには西ヨーロッパ全域に広がっている。1315年には、多雨のため農作物の収穫は壊滅的打撃を受けたが、これによる飢饉は17年まで続き、この飢饉での飢餓と病気による死者は人口の10%に達したといわれる。

1 飢饉当たりの死者は数万人から10万人、ときにはそれを上回ることもあった。そのうえ、ペスト大流行が重なりヨーロッパの人口の1/4から1/3が死亡し、控えめに見ておおよそ4,000万人が死亡したとみられる。ペスト流行の打撃からの回復は遅々として進まず、このことが結果として封建制度の打破につながることになる。しかし、西ヨーロッパでは、産業革命の前段階で経済の活力が生じることで次第に飢饉の記録は減少していった。

ここでイギリスを事例として、今少し詳しく飢饉の実態を述べることにする。Walfordの古典的研究によると、西暦10～1850年の間にイギリスでは187回の飢饉が起きている。これは先述の数値を大きく上回っている。そのうち3回に2回は人為的原因によるものであったと言う。それを、Walfordは4期に分けて考察している<sup>(38)</sup>。

#### ローマ支配期 (AD43～450年)

ローマ帝国のクラウディウス帝は43年にイギリスに侵入する。先住ケルト人は各地で抵抗するが、この戦いでの疲弊で54年に飢饉が起きている。ローマの支配地域のイギリス南部、中央部、東部の低地では農業が急速に広がったが、小麦と羊毛がローマへ輸出されたため、これが原因で飢饉が発生する。54, 192, 228, 306, 310年がその主なもので310年の飢饉では4万人の死者がでていた。この期間には19回の飢饉が起きている。

#### アングロサクソン期 (AD450～1066年)

この期間の飢饉は32回である。5世紀中葉にはローマの支配は終焉期を迎え、それ以前から侵入していたサクソン人がローマに代って支配権を握る。彼等は小国に分立し、社会が混乱したため6, 7世紀には経済交流は妨げられることになる。この背景のもとで飢饉が発生する。特に680年には3年に及ぶ旱魃が原因で恐るべき飢饉が起こる。その状況をWilfridは「3年間サセックスには降雨なく、そこでは恐るべき飢饉が起こった。40人から50人の男が連れ立って海辺の断崖や海岸で手に手をとって飛び込み、その姿は波間に消えていった<sup>(39)</sup>」と記している。やがて北歐からバイキングが侵入し始め、その勢力は北西イングランドに広がっていく。その支配の下で664年にアイルランドで飢饉が発生する。695年のイングランドの飢饉では人肉食すら見られたという。730年のイングランドとウェールズの飢饉、および759年、822, 23年のスコットランドの飢饉でも何千人もの人が餓死している。さらに、936年のスコットランドの飢饉では、人々は互いに相手を貪り喰った<sup>(40)</sup>とされている。まさに地獄絵図を髣髴させる状況となった。次いで1042年には、疑いなくイギリス農民にとって最悪の飢饉が発生することになった。

#### ノルマン時代 (AD1066～1485年)

この期間には、68回の飢饉が起きている。1066年のノルマン征服後、イギリスでは飢饉も支配の手段として利用され、1069～70年には北ウンプリアで大飢饉が発生する。馬、犬、猫はもちろん、人肉食もあった。そして自らを奴隷として売却するものさえいたとい

う。

リチャード1世は十字軍の遠征で長期間国をあげ、その膨大な遠征費と自らが捕虜となってその身代金を支払ったため、国民に重い負担をかけることになり、それが原因となって飢饉が起こる。その後の歴代の国王もイギリス経済を悪化させる失政が多く、しばしば飢饉が起こっている。ヘンリー3世は野心的な対ヨーロッパ政策の実行のために重課税を課し、それが1258年の飢饉となった。1338年から1453年にわたる百年戦争によって、中世以来の政治と社会秩序は混乱し、イギリス経済は、農業生産の低下や農産物の輸出減退など大きな打撃を受けるが、これにペストの大流行が加わり、人々の生活は疲弊して飢饉が数多く発生する。

この期間、ヨーロッパ以外では1064～72年にはエジプトでナイルの洪水が7年間到来せず広範な飢饉が起こり人肉食も見られたという。中国では1333～37年に打ち続く旱魃によると思われる大飢饉が起こり、広範囲で死者がでた。その数は400万人以上との報告もある<sup>(44)</sup>。続く10年間に飢饉はアジアから西に広がりヨーロッパのほとんどの地域に被害がでている。ペストは、この飢饉後の体力減退から始まったと考える説もある。

#### 近代 (AD1485～1850年)

この期間には、37回の飢饉が発生する。ヘンリー8世はイギリスに大土地制度の導入を図るが、そのため多数の農民が土地を取り上げられることになる。これが原因で飢え、飢餓、そして飢饉が発生して人々を苦しめた。エリザベス1世は新しい産業を興し、商業活動を活発にし、経済に活力を与えんとした。1563年に貧民法が施行されたが、不幸にもスペイン戦争による財政負担の重圧が生じ、課税の強化策を採らざるを得なくなる。この時期、イギリス工業製品の大陸における主要市場が閉鎖され、不足する資金獲得のため農産物の輸出がすすめられ、そのため飢饉が起こることになる。Penkethman はその著書<sup>(41)</sup>で1666～68年の飢饉の要因として

- 1) 戦争…土地と農産物の荒廃の為に生活が破壊される
- 2) 季節はずれの天候
- 3) 貨幣価値の下落
- 4) 農産物の過剰消費…無意味な祝宴などによる
- 5) 貪欲な穀物商人と農民による農産物の隠匿
- 6) 過剰な農産物輸出

そのためイギリスでとるべき飢饉対策として、以下の6項目を挙げている。

- 1) 平和…農民の播種から収穫までの自由
- 2) 良き天候
- 3) 金銀の貯蔵
- 4) 食事の節約と浪費防止
- 5) 農産物商人と農民による良心的な販売と輸出
- 6) 外国からの節度ある農産物輸入

その後、戦争、流行病、飢饉にたいして人口増加を抑える動きが出ることになるが、これらの動きを背景にしてマルサスの人口論が現れる。1801年にイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドが統一され連合王国が誕生する。その後は議会の働きもあって食糧対策も進み飢饉は減少に向かう。その最後に起こったのが「1840年代の飢え」

と言われ、1845～51年のアイルランドで発生した大飢饉である。これは世界十大飢饉の一つに挙げられる<sup>(42)</sup>。Ausubel は「大飢饉の年はアイルランドの人々にとって忘れ難い経験となった。飢饉は人々の心を深く傷つけたが、弔いという厳しい現実の前でもあまりに穏やかな声しか発しなかった<sup>(43)</sup>」と飢饉に際してアイルランド人の静かな態度について書いているが、かえって飢饉の悲惨さを示すものと言える。この飢饉の起因は、馬鈴薯に胴枯れ病が発生したためである。この病気にかかった馬鈴薯は食用にならず、種いもにも使えない。アイルランドでは馬鈴薯が主食であり、全カロリー摂取量の約80%を占めている。飢饉の最初の被害は1845年に始まり、島中に広がった。対イングランドとの関係が悪く、支援や補助がほとんど無く、災難を救う措置も採られなかったことも被害を酷くした。多くのアイルランド人はこの飢饉は人災と考えているが、イングランドでは、飢饉は彼等の金使いの荒さ、いくじなしさ、怠慢など自身の責任にあるとする考え方が一般的である。しかし、公平な歴史家はこの飢饉を不可避だったと考えている。この飢饉は単一作物に依存する農業のありかたに問題があることの教訓を我々に与えてくれる。飢饉の死者は100万人、さらに100万人がアメリカ、カナダなどの新大陸へ移住した。この後も数百万人が1870年代半ばまで移住し続け、今世紀始めには800万人の人口が半分にまで落ち込んだ。

#### 東ヨーロッパ (AD1501～1700年)

大航海時代に入って西ヨーロッパ世界は大激動期を迎えるが、さらに、産業革命を経て経済的大繁栄を謳歌する。西ヨーロッパではこの時期から飢饉はほとんど起こっていない。その過程で、東ヨーロッパは西ヨーロッパと接触することはほとんど無く、その繁栄を享受することも無かった。16～18世紀にかけて東ヨーロッパでは150回以上の飢饉があったという。東ヨーロッパは貧困による食糧不足、病いに窃盗・強盗、殺人なども多く、それが飢饉の酷さを示している。ハンガリーでは1505年と1586年の飢饉で親がその子供を食べるようなことさえ起こっている。17世紀初めの3年間に発生した飢饉で、ロシア国境に近いリボニア (Livonia) とロシア最西端の地方では少なくとも50万人の命が失われた。人々は藁、干し草、犬猫に鼠の他あらゆる動物の死肉を食べ、ときには人肉食もあったと言う。

ポヘミアに起こった1770年の飢饉では16.8万人が死亡している。この年、ポーランドの恐るべき飢饉でも、確かな統計資料は得られないが、恐らく多くの餓死者があったと推察される。飢饉は、東ヨーロッパやノブゴロド・モスクワ大公国などロシア地域にも広がり、戦争や政治的対策の遅れ、為政者の優柔不断な上に飢饉の発生についての認識の欠如などによって長期化したのである。さらに、他地域で準備されていた救助を拒否したと言うことすらあって被害を甚大にしたようである。

なお、この他の地域については、1557年のロシア、特にヴォルガ川低地で豪雨と寒さによる広範な飢饉が発生し、数千人から数百万人とも言われる死者がでた。さらに、1650～52年にも過度の雨と洪水で、穀物が不作となり数千人が死亡した。なお、1693年にはフランスでも恐ろしい飢饉が起こって数千人が死亡している。

#### アジア (AD1701～第二次世界大戦まで)

アジアは世界における飢饉発生 の主要地域であり、特に中国、インド、ロシアは飢饉の被害を繰り返し受けてきた。そのため、この三国はまさに飢饉と同義語とされるほどに典型的な飢饉被災国であった。コーネルの挙げた世界十大飢饉の殆どがこの地域で発生して

いる。これらの国はいずれも国土面積、人口共に大きく、しかも人口高密度国であった。多数の貧困な農村人口を抱えており、その上、主要農業地域では降水量が少なく、しかもその年変異率が大きいことなどが飢饉の被害をさらに大きくした。

インドではデカン高原の北西部で飢饉の頻度が高く、中国では黄河河谷部、そしてロシアではボルガ低地が飢饉の主要発生地域となっている。しかし、中国、インド、ロシアで、一般的には十分な降雨があり、めったに旱魃の起こらぬ好条件の土地で、商品生産地中心の農業が行われ、十分に人間の生存可能な地域であるにもかかわらず、飢饉が起こっているのは、飢饉がたんに天災だけではないことを示している。

インドについては本論で詳述するので、ここでは中国とロシアの飢饉を中心に若干の考察をすすめる。

(中国) この国の知識人は BC108年から AD29年のあいだに1,829回の飢饉、または100年に90回の飢饉があったとも記録している。E. スノウは「中国史のうちで注目に値することは、大きな変動がなく飢饉が起こることである」というウィリアムスの記述に全面的に同意し「多くの王朝は飢えた民衆によって倒された。王莽の前漢 (BC 9 ~ AD23年)、隋 (589 ~ 618年)、唐 (618 ~ 907年) に明 (1368 ~ 1644年) などの衰退は著名である。飢饉には多くの要因があるが、特に重要なものは旱魃と洪水であった。有能な統治者や政治家はこのことを常に認識していた。彼等は平和と秩序の維持が飢饉防止を図る最良の手段であることを知っていた<sup>(45)</sup>」と述べている。

この国の飢饉に常に付随して起こるのが腸チフスの流行であった。栄養不良により衰弱した体にとってこの病気は死を決定的にした。P. Bohr は1876年の山東省の飢饉の犠牲者の窮情を「組織的掠奪行為は至る所で行われた。飢えた民衆は死体から衣服を剥ぎ取り、商人の商品を盗み、食べ物を買う金を得るため他人の住居に押込んだ。僅かな現金を得るために女性や子供が売り飛ばされた。こうして家族は崩壊し、各自が食べ物を求めて四散していった。生きんがために必死になった親はその子供を殺す。飢えた犬や狼の群れは屍肉だけでなく、生きている者にも襲いかかる。しかし、飢饉の最も衝撃的な事件は、人肉食が急速に広がり、それも最初は死肉を食したが、やがて人を殺して食べるようになる。政府の禁止令にも拘らず人肉が市場で公然と販売されていた<sup>(46)</sup>」と報告している。

19世紀の中国における被害の大きい飢饉として、1810~11, 1846, 1849, 1875~79, 1892~94, 1920~21, 1928~29年などが挙げられる。そのうち、1875~79年の飢饉は世界十大飢饉<sup>(47)</sup>、しかも最悪の飢饉といわれ、900万人が死亡した。三年間にわたる旱魃、洪水、いなご害、台風、地震などの自然災害が誘因となって、北部諸省では農作物が潰滅し、食糧不足が永続化した。被害をさらに酷くさせたのは、被害地域が外世界から隔絶しており、この災害の情報は一年後に漸く伝わり、その間に大被害が起こったのである。「一万人の穴」として知られる巨大な墓に死体が埋められた。窮状の知らせが世界に届いた後ですら、地理条件的には、被災地域が内陸のため輸送事情が悪かったこと、さらに、政治的障害が加わり救援活動は妨げられた。救援物資は厳重な警戒のもとで罹災地に届けられたが、それは、飢えた人びとが自暴自棄になって輸送隊を襲い、輸送車を引く動物までも殺戮したからであった。道端には白骨が並び、野犬や狼の群れが衰弱して死に瀕している人を襲った。飢えた者はやむをえず人肉を食べたり、子供を奴隷に売ったりしたようである。飢え、暴力、病気などによる死者は900万人から更に多い1,300万人とも推定されている。1892年から94

年にかけての旱魃による飢饉では、約200万人の死者がでたと言われる。1920～21年には旱魃による不作で食糧不足は酷く、およそ50万人が餓死し、2,000万人が被災した。

1928～29年の飢饉は世界十大飢饉にも挙げられる<sup>(48)</sup> ように酷かったが、その中心は河北省で、その他に河南省、陝西省、甘粛省などで広範な旱魃により少なくとも200万人(300万人?)もの人命が失われている。この飢饉以降は19世紀のものと比較すれば、死者数は急減している。その原因の一つとして、鉄道の建設による救援物資の輸送手段の改善があった。

1949年の中華人民共和国の誕生後、1960年前後の“大災害期”にも大飢饉が発生している。その犠牲者の数は、その定義や計算方法により、1,361～4,638万人ほどと大きな差があるが、一般的には2,000万人前後とみられる。61年末の総人口を、55～58年までの4年間の平均人口増加率2.29%に基づいて推計すれば、7億632万人と見込まれるが、実際は6億5,994万人であったので、実際値は推測値よりも4,638万人も少ないことになる。アメリカの中国人口研究者ジュヂュス・バニスターが、56～58年と62～64年の平均死亡率と推定死亡率との差から求めた推計では、59年に364万人、60年に1,827万人、そして61年に417万人の計2,608万人が飢餓の犠牲者数であろうと報告している。ただし、この手法は出生率を一定としているため、死亡率は高めの値となる<sup>(49)</sup> と言われる。

また公表値の出生率と死亡率との差、自然増加率と、公表値の期末人口から算出される増加率との差から人口学的に試算しても、約1,600万～2,000万人ほどの「非正常死」が浮かび上がってくる。なお、この大災害期には低カロリー、低栄養によってなんらかの病気になって死亡するもの、たとえばムクミ病などがあいついだという。そのため58年の自然増加率はマイナス0.113%、59年マイナス3.026%、60年マイナス4.223%、61年マイナス1.761%と人口絶対減が4年も続いた。

表2 中国の穀物生産と政府調達  
(単位:100万t, %)

	穀物生産量	政府調達量	調達比率
1955	183.9	36.2	19.7
1956	192.7	28.7	14.9
1957	195.0	33.9	17.4
1958	200.0	41.7	20.9
1959	170.0	47.6	28.0
1960	143.5	30.9	21.5
1961	147.5	25.8	17.5
1962	160.0	25.7	16.1
1963	170.0	28.9	17.0
1964	187.5	31.8	17.0
1965	194.5	33.6	17.3

(荏開津典生, p. 14)

表1 「大躍進」による犠牲者数の推計

	死亡率 (%)	増加死亡率 (%)	死亡増加数 (万人)	同 Banister 推計値
1958	11.98	1.18	78	
1959	14.59	3.79	255	364
1960	25.43	14.63	969	1,827
1961	14.24	3.44	227	417
計			1,529	2,608

注) 増加死亡率とは、1957年の死亡率10.8%の差を表わす。それと公表人口数をかけし死亡増加数を求めた。Banister 推計値は、1956—58年と1962—64年の平均死亡率と、推計死亡率との差から求めた。  
(荏開津典生, p. 141)

この時期、食糧不足がいかに酷かったかは表によっても明らかである。1955年以降、2,000キロカロリーを超えていた1人当たりの食事エネルギー供給量は、1958年を境に急激に落込んで、1960年には1,453キロカロリーという最低の水準にまで低下する。この落ち込みは長く続いて1965年ようやくもとの水準に戻った。この飢饉は、自然災害、すなわち、華北の旱害、華中、華南の水害などが3年連続で起きたのを契機とし、政府の1958年からの積極的な経済拡大を図らんとした「大躍進」運動の政策の失敗、特に重工業化優先政策の誤り、農業から労働力やその他のインプットを工業偏重の経済路線で工業部門に移したことなどが原因として挙げられる。すなわち、農村における人民公社制度の導入や「共産風」浸透に伴う幹部の押しつけは、農民の生産意欲を減退させ、さらに、非現実的な深耕と密植の奨励という技術指導の失敗、この他に情報の誤り、つまり中央政府におもねった生産量の過大報告が積み重なったため過度の食糧のとりたてがなされ、さらに誤った情報は、食糧が余っていると判断されたことによって作付制限をもたらす結果となった。また、政府は生産量の過大報告に基づいて食糧の輸出を増加させている。旧ソ連との対立による援助打ち切りと全面撤退に対する債務返済のための無理な農産物輸出もこの悪循環に拍車をかけたと言われる<sup>(50)</sup>。このように、現在では飢饉の最大の原因は毛沢東主席を中心とした政府の失政にあったと見るのがほぼ定説となっている。

(ロシア) ロシアと旧ソ連の文学には数多くの飢饉が記載されている。ヨーロッパロシアだけで西ヨーロッパを上回る広大な国土面積を有し、そのうえ人口も多い。しかし、国土が高緯度にあり、大陸性の気候が広がるために低温、乾燥など農業にとり悪条件の土地が多い。さらに、気候の年変化も大きいため、これらが飢饉を呼ぶことが多い。

伝統的な農業生産は役畜不足、簡単な木製の鋤利用、肥料使用の制限、単一作物への依存、人力による播種、手鎌による収穫、穀笄による脱穀など、遅れた農法が一般的で生産性も低かった。農産物のおよそ90%が小麦、ライ麦と幾らかのそばに限られていた。しかもこの国は穀物の大輸出国であったため、貴族、大地主の豪華な生活の反面、大多数の農民は農奴身分でその生活は貧しく、食事は安価な穀物中心の貧弱なものであった。量的不足による栄養不良、質的不足による栄養失調状態にあるものが多く、特に蛋白質が不足していた。ロシアの飢饉についてはよく解らないことが多いが、Dando が作成した地図<sup>(51)</sup>により主要な飢饉を概観する。

第一地域 (971~1550年) 商業、文化の栄えたロシア最大の都市ノボゴロドを

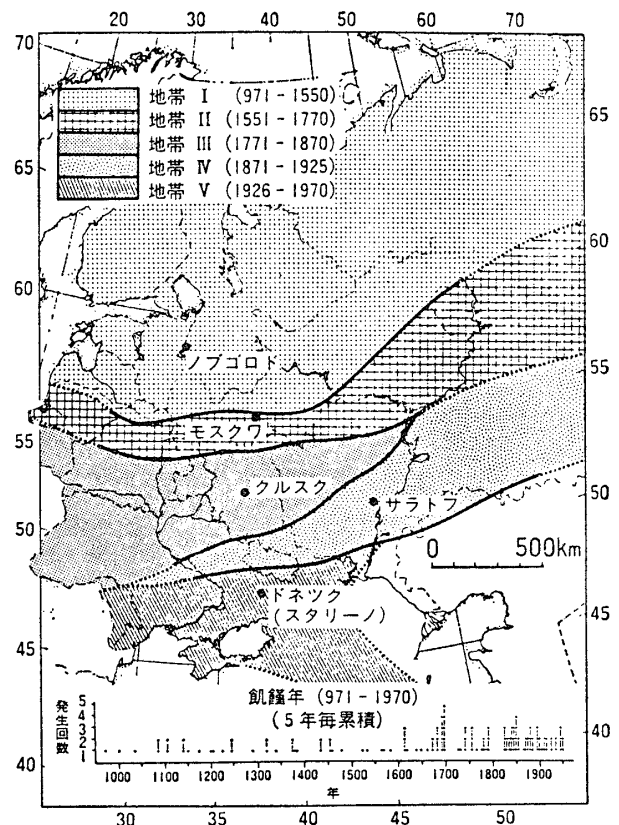


図3 ロシア=ソ連の飢饉地帯と発生頻度、971年~1970年

(Dando, p. 147)

中心とする地域で、バルト海沿岸平野の北西部が含まれる。全期間を通じてで32回の飢饉が起こり、18年に1回の割合で飢饉が発生したことになる。この地域では飢饉の25%が早魃を主な原因として発生している。ここは気候が寒冷で、豊作年でさえ必要充分な食糧を供給できず、ましてや不作の年は厳しい食糧事情となって不足分は輸入に依存することになる。

第二地域(1551~1770年) モスクワを中心とする地域であるが、一部は第一地域と重複する。ここでは34回の飢饉があり、5~6年に1度の割合で飢饉が起こったことになる。この地域での飢饉は早魃が主要原因ではなく、政治的原因によるものが多い。農業生産は豊かで平年的には食糧不足の生じない地域であるが、それでも飢饉が起こるのはそのためであると考えられる。1557年にボルガ低地で酷い豪雨と寒さのため広範囲の地域で飢饉が起こり、その数字に大きな差があるが五千人から数百万人の死者がでたと伝えられている。

第三地域(1771~1870年) 29回の飢饉が発生、このうち早魃によるものは3~4回のみである。クルスクを中心とする地域で、帝政ロシアはここから西へあるいは南方向へと拡大した。農業に従事させる目的で外国人の入植者を招いている。それは農地に余裕があったからである。この地域の飢饉の原因は自然的なものではなく、厳しい農奴制による農奴身分の農民の栄養状況が悪かったからである。すなわち、地主による強引な農作物の徴収によって、農民の生活は必要最低量以下の食糧自給水準に追い込まれ、余った部分は輸出に向けられたのである。飢饉の原因がここに求められる。

第四地域(1871~1925年) この時期の飢饉は19回で、3年弱に1度起こったことになる。この地域は降水量が少なく、3回の飢饉のうち2回が早魃を主要原因としている。政府は農産物の輸出に積極的で、この地域は世界の農産物の主要輸出地域となっており、世界の穀物の価格決定を左右するほどであった。しかし、19世紀末から20世紀初頭の全ロシアの飢饉は、早魃よりも過剰人口と苛酷な徴税、穀物の輸出によることが多かったようである。この時期の末期に社会主義革命が起こり、帝政が倒れてソビエト政権が権力を握る。その政権による強引な社会主義化の混乱の中で、1921~22年にウクライナ地方とヴォルガ地方を含むロシア南部に早魃が2年続きで起こり、穀物生産は平年の半分以下に落込み飢饉が起こっている。約二千万人が影響を受けるが、この飢饉による死者は120万人から500万人と推定されている<sup>(52)</sup>。

第五地域(1926~1970年) この地域は冬小麦の大生産地で、ロシアの穀倉地帯の中心をなし、西欧への穀物の主要輸出地域であった。ただし、雨が少なく早魃多発地帯に属している。ここではこの時期に7回の飢饉があり、そのうち4回は早魃が主な原因であった。その上、社会主義的集団農業が食糧生産を混乱させ、飢饉の原因となったことにも注目する必要がある。特に1932~34年には、自然的原因ではなくソ連政府の無分別な穀物輸出政策および農業の強制的集団化が原因で大飢饉が起こり500万人の死者がでた<sup>(53)</sup>。その生産量からみて食糧不足は起こるはずがなかったが、政府は、1932年と33年にそれぞれ170万トン、180万トンを輸出した。これは、少なくとも1日に1,000カロリーを1,750万人に2年間は提供できる分に相当すると言われている。農民は集団化の混乱と抵抗心で自ら所有する家畜を殺し、そのため国内の家畜は半分に減ったと言われる。政府はこの事実を外部世界に隠すために苦心したようである。政府の重工業化のための資金、巨額の国防費、農業集団化の費用などを農業から得んとしたため重い負担を農民に課すことになったのが根本

的な飢饉の原因であったと考えられる。第二次大戦後の1946年から47年にも飢饉が起こったがその内容は明らかでない。

以上の概観からロシアの飢饉の原因は自然的、人為的要因が複雑に絡んだ複合的なものであったことがわかる。それを列記すると、自然的要因として最も重要なものは気候、特に降水不足による早魃と低温が挙げられるが、北部ロシアでは低温、南部ロシアでは早魃と言うように整理できる。人為的要因としては戦争、誤まりと無能な政策、輸送・通信の不備、農奴制、集団農業の欠陥、疾病、流行病、恐慌、食糧の投機などが挙げられよう。

最後に、アフリカについても簡単に触れておきたい。

(アフリカ)

第二次世界大戦後、国際的な協力、援助活動により中国、ロシアにおける飢饉は急激に減少してきた。そのため、飢饉の中心は次第にアフリカに移っていく。第二次世界大戦以降の飢饉としてはまず、1943年のルアンダ、ウルンジで発生したものが挙げられる。この飢饉では、3万5,000人から5万人が死亡した。1960～61年にはコンゴ（現ザイール共和国）でベルギーからの独立後に激しい内戦が起こり、これによる混乱と人口移動で飢饉となる。幸い国連が食糧援助を実施したため多くの生命が救われた。続いて1967～69年にナイジェリアにおいて、イボ族が東部地域で中央政府から離脱したことに端を発して内戦が勃発し、その混乱が原因で飢饉が起こった。その被害はイボ族の住むビアフラに集中した。100万人の死者の他に、350万人に極端な栄養失調患者が生じた。

アフリカ各国の飢饉の歴史はわからぬことが多いが、エチオピアの歴史は飢饉の歴史でもあった。記録に残る最古の飢饉は9世紀、その後現代に至るすべての世紀に飢饉があった。13世紀には4回の大飢饉、16世紀から17世紀の間には主要な飢饉が9回以上あり、それらを含めると計23回の飢饉が記録されている。さらに1888年から1892年にかけては、人口の3分の1を失う大飢饉がエチオピアを襲った<sup>(54)</sup>。この飢饉はいまでも“kifu qan”（悪魔の日）として記憶されている。エチオピアの飢饉は早魃による凶作が引き金になって起こることが多い。人口の80%が農業従事者であるが、一般に凶作でなくてもカロリー摂取の水準が低いために僅かな減収が飢饉を招くことになるのである。その上に道路や倉庫などのインフラストラクチャーが整備されておらず、トラックも不足していたため適切な食糧輸送ができないことも飢饉の原因となる<sup>(55)</sup>。このエチオピアに限らず、サーヘルでは早魃が慢性化している。

門村浩はサーヘルでの飢饉の原因について自然地理学者の立場で考察している<sup>(56)</sup>が、ここではその所説を略述することにする。

サハラ砂漠とその南縁地域における7～19世紀にかけての気候変動を概観すると、7世紀初めから12世紀までは全般的に湿潤な気候が続いた。13世紀前半に乾燥化、14世紀にはやや湿潤化しこれが16世紀まで続く。しかし、この湿潤な時期が顕著な乾燥期で中断されると、これが原因で内戦や人口移動、飢饉が多発している。16～18世紀にかけては、全体として、現在より相当湿潤な気候状態にあった。サーヘルに強大な国家が起こったのもこの気候に一因があるものと考えられる。しかし、この湿潤期にも何回かの顕著な早魃が記録されている。

1820年代の終わりから30年代にかけてサーヘル全域は厳しい早魃を経験している。1866年以降、湿潤期が回復したが1894・95年で終わりを告げる。それ以降急速に乾燥化が進展



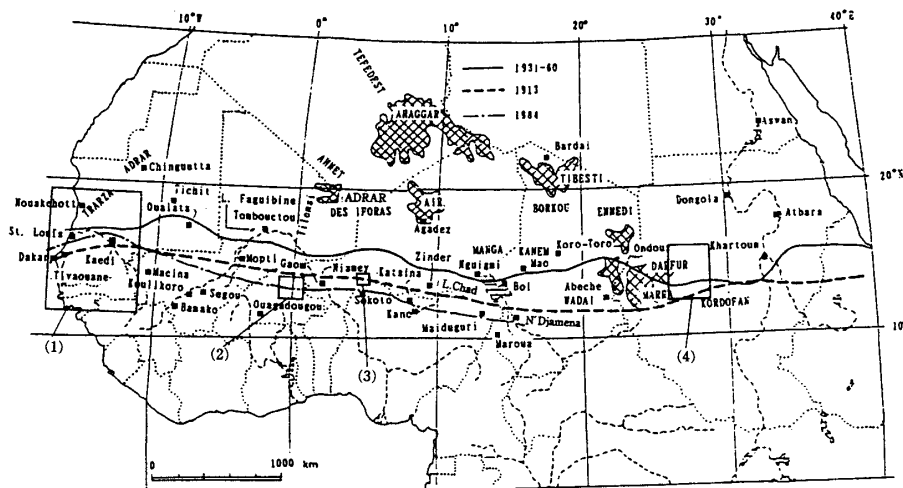


図4 顕著な干ばつ年、1913年および1984年における“飢饉前線”（300mm等雨量線）の南下  
 平年位置（1931—1960年平均）からの隔たりを示す

（門村浩，p. 73）

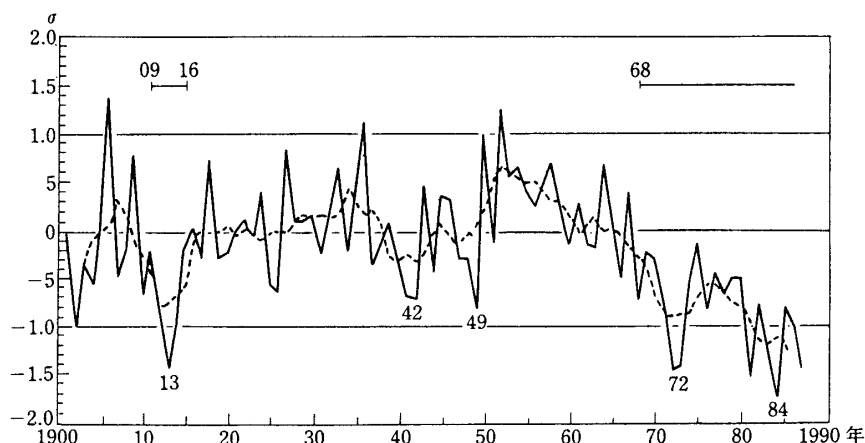


図5 西アフリカ・サーヘル地帯における降水変動：1901—1987年（Shinoda, 1989 に加筆）  
 全観測点の全期間平均降水量と各年平均降水量の差を標準偏差で除した値で示す。

（門村浩，p. 82）

する。そのなかで1910～16年，特に1913・14年に大旱魃があり大飢饉が発生した。

第二次大戦後は1960年代の後半から四半世紀にわたる長期の厳しい旱魃が続いた。1968年から5年間に「旱魃による飢え」が世界中に報道された。ブルークの研究によればタンザニアでの地域的凶作はほとんど毎年の出来事となっていた。ルフィジ渓谷やキロムベロ渓谷では6年に1回の割合で深刻な凶作が発生しており，ムブルとコンダの両ディストリクトでは年々のように不作に見舞われている。凶作の頻度は地域によって異なるが，結果的にはタンザニアのどこかで飢饉的凶作が発生した。この地域的凶作は，アフリカ諸国のいずれの国々にも認められる。アフリカのお天気まかせの食糧生産に関する問題のひとつとして，まさに年々の気象変動の不安定性を指摘しなければならない<sup>(57)</sup>。

しかし，アフリカの飢饉が世界に喧伝されるようになったのは1970年代のサーヘル  
 の飢饉からであった。毎年150万haの可耕地が砂漠化している<sup>(58)</sup> と言う。専門家によるとこの地域の旱魃は異常気象によるものでなく，この地域特有の気候にあると言われる。報道によると，1974年にFAOが現地調査を実施したが，その結果「鉱物資源の宝庫モーリタニ

表 3 サハラ南縁地帯における15世紀以降の気候事変

乾 燥 期, 干 ば つ	湿 潤 期, 大 雨
1972-73, 1983-84 最悪 1968 サーヘル・スーダン干ばつ	1967-69 エチオピア多雨 1961-64 サーヘル湿潤 1951-54 サーヘル湿潤
1944-48 サーヘル干ばつ 1941-43 サーヘル干ばつ	1916-18 サハラ・サーヘル多雨
1910-16 サーヘル干ばつ; 1913-14 最悪 1896-1916 サーヘル乾燥期	1866-94 サハラ・サーヘル湿潤期 1860-62 サハラ大雨 1851-54 チャド湖大拡大
1860-63 セネガル, St.-Louis 小雨 1854-55 モーリタニア, Tichit 飢饉 1847-48 モーリタニア, Terarza 飢饉 1828-35 チャド湖一部干出 1828-33 Wadai 飢饉 1801-13 チャド湖縮小	1779-1790 チャド湖大拡大
1771-75 モーリタニア, サーヘル飢饉 1770 頃 チャド湖一部干出 1751-53 Bornu (Dounama 時代) 酷い飢饉 1738-51 Bornu (Mohamed 時代) 2年の飢饉 1721-45 Mossi (Kenga 時代) 飢饉 1711-26 Bornu (Dounama 時代) 7年の飢饉 17世紀末 Tibesti 放棄 1681-87 Wadai 河川流路切断, 干ばつ 1548-66 Bornu (Dounama 時代) 飢饉 1537-39 Niger Bebd 干ばつ, 飢饉 1420-65 Bornu 飢饉, Tuareg 南下	1550 湿潤期の終わり  1480-1510 Tibesti 居住

(Plote, 1974; Nicholson, 1980; Maley, 1981 より編集)  
(門村浩, p. 66)

アを除きサーヘルのどの国も全人口を養うに十分な穀物を生産していた」と報じている。この時期、ダカール港にはサーヘル飢饉地帯へ国際的な救援物資が陸揚げされている横で、サーヘルから輸出される農畜産物が船積みされていたと言う。サーヘル諸国の政府は「早魃が飢え」でないことが暴露されそうになりあわてて FAO に圧力をかけたとも言われる。ここに介在したのが換金商品作物を取引して莫大な利益をあげる多国籍のアグリビジネスとサーヘル各国政府の支配層で、彼等が陰で動いたと言われる<sup>(59)</sup>。1984年夏以降、「アフリカ飢餓ブーム」が日本のマスコミを席捲する。アフリカでは24カ国が深刻な早魃の被害を受け、1億5,000万人が飢餓に直面している、と報道された。そのうち「飢餓ブーム」の正体が明らかになってくる。それは85年に雨が降り緑を回復し、食糧は順調に生産されたものの、飢えは依然として続いたのである。この事実から早魃が飢饉の主な原因ではないことが明らかになった。そうしたなかで1億5,000万人の飢餓の実態は、関係24カ国の全人口が計測されたものとわかる。あるジャーナリストは「私たちは飢餓地帯取材したわけではない、飢えに苦しむ農村には足を踏み入れることは許されなかった。このことはエチオピアを訪れたすべてのジャーナリストに共通していたと言う。取材を許されたのは飢えの現場ではない」と。エチオピアの救援センター内で政府や援助関係者が写真を取らせ

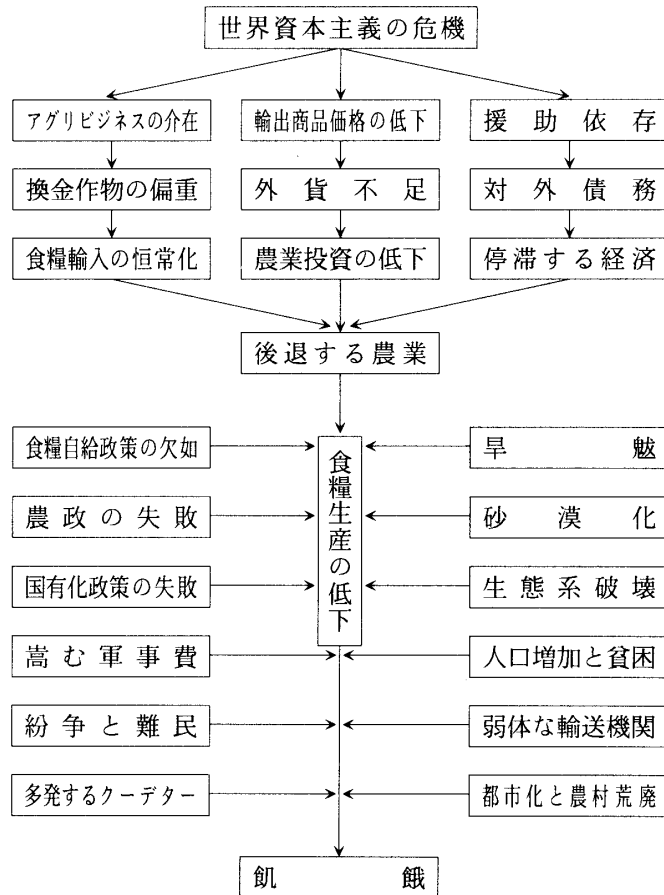


図6 危機の構造

(川端正久, p. 13)

たがる場所があり、そこでは痩せ衰えたクワシーオーコ症の子供たちを見たと言う。しかもそれはサナトリウムとは名ばかりの重症結核患者の遺棄場所で、写真を撮っているとボランティアのデンマーク人の看護婦から「これを飢餓と思っでは困ります」と苦々しい表情で注意されたと言う<sup>(60)</sup>。このことは飢饉を利用して援助を受けるだけが目的の国が多かったことを示している。しかしこの事実とはもかく、この飢饉の実態は、これまで世界各地で起こったものと本質的に異なったものと言える。つまりこれは、急増する人口を抱え、その人々の生活水準の向上を求めらる中での、アフリカ各国の政治、経済、社会、軍事などの根幹に基づく構造的な問題であり、しかも、アフリカの人々の自助努力だけでは解決しえぬ全世界的な課題だと言うことである。川端正久はこの「危機の構造」を図式化し、その背景が「植民地の独立後も旧宗主国をはじめとする新植民地主義的な支配と搾取が今もアフリカに続いており、このことが世界資本主義の危機に転嫁されているという世界政治経済の要因となっている<sup>(61)</sup>」と考えている。

(未完)

注

(1) 1994/95年版 日本国勢図会 (1994), 国勢社, p. 194

(2) 朝日新聞1995年9月26日朝刊

- (3) Castro, J. de (1952): *The Geography of Hunger*, Little Brown & Co. (邦訳) 大沢邦男 (1975):『飢餓の構造』, みき書房, p. 7
- (4) 前掲 (3) p. 8
- (5) Dando, W. A. (1980): *The Geography of Famine*, V. H. Winston & Sons, p. 58 (邦訳) 山本正三, 斉藤功訳 (1985):『地球を襲う飢餓』, 大明堂
- (6) ロバート・マルサス, 高野岩三郎, 大内兵衛訳 (1935):『初版 人口の原理』, 岩波文庫, pp. 29-32
- (7) Brown, H. (1954): *The Challenges of Man's Future*, Vikas Pub., p. 56
- (8) 菊池勇夫 (1994):『飢餓の社会史』, 校倉書房, p. 11
- (9) ジェームス・コーネル, 本蔵義守訳 (1977):『世界の大災害 破壊からのレポート』, 講談社, p. 160
- (10) スタンプ, D. 別枝篤彦, 中村和郎訳 (1967):『生と死の地理学』, 古今書院, pp. 80-97
- (11) カストロ, 大沢邦雄訳 (1975):『飢餓の構造』, みき書房, p. 16
- (12) Shaw, G. B. (1946): *Man and Superman*, Penguin, p. 196
- (13) Nicol, B. (1975): *Causes of Famines in the Past and in the Future*, p. 11
- (14) Post, J. (1975): *The Last Great Subsistence Crisis in the Western World*, The Johns Hopkins Univ. Press. p. xiii
- (15) Lowenberg, Mietal (1974): *Food and Man*, John Wiley & Sons, p. 59
- (16) 前掲 (5) pp. 5-23
- (17) Paddock, W. and P. Paddock (1967): *Famine 1975! American Decision*, Little Brown & Co, p. 50
- (18) Rechcigl, Jr. (1973): *Man, Food and Nutrition*, CRC Press, p. 164
- (19) Brothwell, D. and P. Brothwell (1969): *Food in Antiquity: A Survey of the Diet of Early Peoples*, Praeger, p. 176
- (20) Farmer, J. (1969): *Available Food Supplies*, Cambridge, The Univ. Press, p. 89
- (21) Mayer, J. (1976): *The Dimensions of Human Hunger*, Scientific American, Vol. 235, p. 40
- (22) Malin, K.: *How Many will the Earth Feed?* Progress Pub., p. 5
- (23) Southard, (1968): *Famine*, Encyclopedia of Social Sciences, Vol. VI, pp. 322-326
- (24) Dando, W. (1976): *Six Millenia of Famine—Map and Model—*, Proceedings of the Association of American Geographers, Vol. 8, p. 20
- (25) Dando, W. A. (1980): *The Geography of Famine*, V. H. Winston & Sons, p. 87
- (26) 前掲 (1) pp. 71-87
- (27) 中島健一 (1977):『河川文明の生態史観』, 校倉書房, pp. 104-107
- (28) Bhatia B. M. (1965): *Famines in India*, Konark Pub., p. 2
- (29) 前掲 (1) p. 73
- (30) 関根正男訳 (1956):『旧約聖書 創世記』, 岩波文庫, p. 118-119
- (31) 前掲 (5) p. 32
- (32) 前掲 (5) p. 68
- (33) Dill, S. (1933): *Roman Society*, Macmillan Ltd., p. 148
- (34) Jones, A. (1964): *The Later Roman Empire, 284~602*, Univ. Oklahoma Press, pp. 795-810
- (35) Keys, A. et al (1950): *The Biology of Human Starvation*, 2vol., Univ. of Minesota Press, pp. 1248-1249
- (36) Davis, W. (1923): *Life on a Mediaeval Barony*, Harper & Bross, pp. 255-256
- (37) Bennett, H. (1938): *Life on the English Manor; A Study of Peasant Conditions 1150-1400*, Cambridge Univ. Press, p. 237

- (38) Walford, C. (1970): *The Famines of the World. ; Past and Present*, Burt Franklin, pp. 4-16
- (39) Bell, G. (1881): *Ecclesiastical History of England*, p. 194
- (40) Thompson, J. (1966): *Economic and Social History of the Middle Age (300-1300)*, Frederik Ungar, p. 762
- (41) Penkethman, J. (1638): *Artackthos or a New Book Declaring the Assise the Bread*, Bishop & Edward Griffine, p. 13
- (42) 前掲 (9) pp. 160-170
- (43) Ausubel, H. (1960): *In Hard Times ; Reformers Among the Last Victorians*, Columbia Univ. Press, pp. 267
- (44) 前掲 (18) p. 168
- (45) Snow, E. (1962): *The Outer Side of the River ; Red China Today*, Random House, p. 457
- (46) Bohr, P. (1972): *Famine in China and Missionary*, Havard Univ. Press, pp. 20-21
- (47) 前掲 (18) pp. 162-164
- (48) 前掲 (18) p. 165
- (49) 岩林敬子 (1994): 『中国 人口超大国のゆくえ』, 岩波新書, pp. 44-45
- (50) 荏開津典生 (1994): 『飢餓と飽食』, pp. 142-144
- (51) 前掲 (1) p. 147
- (52) 前掲 (18) p. 165
- (53) 前掲 (18) p. 164
- (54) Sen, A. (1981): *Poverty and Famines*, Oxford Univ. Press, pp. 86-112
- (55) 前掲 (26) p. 138
- (56) 門村浩 (1991): 『熱帯アフリカにおける環境変動と砂漠化』  
門村他編『環境変動と地球砂漠化』, 朝倉書店, pp. 68-73
- (57) 犬飼一郎 (1976): 『アフリカ経済論』, 大明堂, p. 123
- (58) 篠田 豊 (1985): 『苦悶するアフリカ』, 岩波新書, p. 17
- (59) 前掲 (34) pp. 25-26
- (60) 前掲 (34) pp. 25-26
- (61) 川端正夫 (1987): 『アフリカ危機の構造』, 世界思想社, p. 13